

Title	殉教を免れた李源永牧師の歩み：『学者・牧会者鳳卿李源永研究』第5章の翻訳
Author(s)	林, 熙國高, 萬松
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.50, 2011.3 : 314-344
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3118
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

殉教を免れた李源永牧師の歩み

——『学者・牧会者鳳卿李源永研究』第五章の翻訳

林 熙 國 著

高 萬 松 訳

《解 説》

ここに訳出するものは、ソウルの長老会神学大学、林熙國教授の著書『선비목회자봉경이원영연구』〔学者・牧会者鳳卿李源永研究〕（基督教文社、二〇〇一年）菊判三二五頁のうち、著者の許諾を得て、第五章（全十六章構成）を翻訳したものである。

原書は李源永牧師（大韓イエス教長老会、安東西部教会）の生涯と思想を著したものである。第一章成長期、第二章三・一独立運動への参加、第三章キリスト者となる過程、第四章教会の牧師としての働き、第五章殉教を免れた牧師の歩み、第六章戦後の教会の復旧とその働き、で構成されている。しかし、この第五章だけで李源永の生涯と思想をすべて理解するには限界がある。そこで、ここに訳者解説として、短く、李源永牧師の生涯をまとめてみたい。

李源永（一八八六一一九五八）は一九一九年の三・一独立運動に慶尚北道安東地方のリーダーとして参加したという理由で、一年間、ソウル西大門刑務所に収監された。その中でキリスト教に改宗し、一九三〇年に牧師となったが、一九三八年に当局の命令によつて牧会が中止された。当時、朝鮮イエス教長老会の總會さえ神社参拝を認めた社会的状況の下で、李は、神社参拝も、創氏改名も、東方遙拝もすべてしなかった。そのため最終的に四度にわたつて収監され、拷問の末、死と同然の状態に置かれた。そのような状態で一九四五年八月一日の「光復（解放）」を迎えた。

その後、大学の設立など教育者としての働きもあつたが、ここでは牧師としての働きだけをあげよう。それは、韓国教会内部における神社参拝をめぐる対立に対して、「和解」をもたらすように尽力したということである。「光復」後、韓国の長老派は内部分裂していたが、その主な理由は植民地治下での神社参拝の問題であつた。そして李源永が總會議長に選ばれた一九五四年の第三九回大韓イエス教長老会總會では、神社参拝を積極的に勧めた以前の總會（一九三八年九月）での決議を取り消す声明を発表した。声明書の要旨は、日本帝国主義からの強圧によつて神社参拝が決議されたということ、その決議が神の戒めを犯していたので、今回の總會において取り消すという内容であつた。總會の最終日、李源永の「和解」を主題とした説教に対して、長老派の新聞は次のように評価している。すなわち、今回の總會によつて「神社参拝の拒否によつて教会から除名された信徒と牧会者に復権される道が開かれ、神社参拝の問題によつてお互いに信頼感を失つていた人々が和解し、第三三回總會以来、分裂と争いの繰り返しであつた總會が今回の總會で解消され、終わりを告げた」と評価しているのである。^{（訳注1）} 彼は一九五八年に天に召されたが、林教授は「神の僕であり、イエスの弟子としてキリストの体である教会への奉仕に生涯を捧げた李源永は時代の状況に従つて『学者』、『独立運動家』、『牧会者』、『殉教を免れた牧師』、そして『教育者』として働き、地上から永遠の都に

帰った」^(訳注2)と言っている。

彼は現在でも彼の弟子たちの心の奥に「永遠の師」(原書「序文」より)として記憶されている(併せて『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』一九卷三号(二〇〇九年)八―九頁を参照されたい)。

原書は、林教授が「李源永牧師記念事業会」からの依頼を受け、三三五頁の大著にまとめたものである。

日本帝国主義の皇国臣民化政策

日本帝国主義は「満州事変」(一九三二)をきっかけとして本格的に中国大陆の侵略を始めた。また日本帝国主義は「上海事変」(一九三二)を経て「日中戦争」(一九三七)を起こし、ついに米国などを相手に「太平洋戦争」(一九四一)を引き起こした。戦争を推進させるために日本帝国主義は国家全体を戦時体制に変え国民を戦争に追い込んだ。この時期に日本帝国主義は朝鮮に対して二つの政策を同時に推進した。一つは、朝鮮を大陸侵略のための兵站基地として活用するためであり、また農工並進政策を推進しながら日本―朝鮮―満州のブロック経済を開発することであった。⁽¹⁾もう一つは、戦争に対する朝鮮の人々の協力を得た後、朝鮮を日本に完全に同化させるために「皇国臣民化(以下、皇民化)」政策を推進することであった。この同化政策は「内鮮一体」を掲げて推進し、朝鮮人を皇国臣民にすると同時に朝鮮人の民族精神を抹殺し、「二等日本人」を作り戦争に活用するという意図があった。これと同時に日本帝国主義は、朝鮮人に天皇と国家に献身的に忠誠を強いる国体明徴と献身報国という精神を植え付け、どのような試練にも忍耐し目的を

貫徹する忍苦鍛錬などの綱領を定め、完全な皇国臣民としようとした。皇民化政策は「朝鮮教育令改定」（教育）、「神社参拝強要」（全体主義国家イデオロギー）、そして「創氏改名」（日本帝国主義の皇民化）などの基本の骨組みで構成されている。

1 朝鮮教育令改定

日本帝国主義は、一九三八年に朝鮮教育令改正を推進し総督府の直接指導の下、朝鮮教育会を置いた。朝鮮教育会は学校が天皇の威厳に満ちた神聖な領域であると学生たちに教え、彼らが天皇を崇拜し大日本帝国と東洋の平和のために身命を捧げるよう強要した。学校の名前も変えた。例えば普通学校・高等普通学校・女子高等普通学校をそれぞれ小学校・中学校・高等女学校と「日本の教育制度に合わせて」名前を変えた。教科目と教科課程も日本と同様に構成した。この時に改正された内容を見ると、全ての学年で修身・日本語・朝鮮語・算術などの科目を教え、「小学校の」五年と六年では上記科目に加えて日本史・地理・理科・家事（裁縫）を教えた。この中で修身・日本史・地理は天皇崇拜思想の教育に用いられた。教科課程改編を通して顕著に変わったのは、小学校で日本語の授業が増え、（特に一、二年）朝鮮語の授業時間が減ったことである。朝鮮語授業が週当たり二〜四時間であったのに対し、日本語授業は週当たり九〜一二時間となった。さらに朝鮮語が必修科目から外され選択科目に変わった。このようになると公立学校の半数以上が朝鮮語を教えなくなった。

朝鮮教育令改正は、日本帝国主義の植民統治を一層強化するものであった。それは小学校から皇国臣民教育に力を入れ国民全体を内鮮一体の道に並ばせようとする画策であった。改定された朝鮮教育令は全体主義的画一化と共に思想統制・戦争協力・皇国臣民意識強化が強調された。また幼児時代から皇国臣民意識を身につけさせるために、学校ではさ

まざまな行事が実施された。例えば国体明徴日（毎月一日、一五日）・愛国日（毎月一日）・富国貯蓄日（毎月六日）・勤労報国大奉仕日（毎月六日及び適当な日）・全校体育日（毎月一〇日）・自治実行日（第一週月曜日）・廃物回収献金日（月一回）・忍苦鍛錬日（毎週土曜日）・分列式（月一回）・少年剣道日（月一回）・神社参拝（毎日）・国旗掲揚（一日、一五日、祝祭日）などであった。

2 神社参拝強要

神社参拝強要は、日本が皇民化政策を効果的に展開するために国民を全体主義的イデオロギーに追い込み、そこに屈服させるための手段であった。神道は日本で発生した宗教的慣習で、古代日本人の神に対する信仰と祭司儀式にその起源を見出す。⁽²⁾日本では天皇の権威強化に加えて国家と神道の結び付きが始まった。神道は明治維新を前後に、天皇を現人神と考え、天皇の祖神と祭る天照大神と共に他の神話的人物と英雄たちとを神社で神霊として崇拜する宗教の形式へと変容した。

三・一運動を弾圧した時期の一九一九年七月に日本帝国主義は朝鮮神社を建てた。この神社に日本帝国主義は天照大神明治天皇を祭祀の神とした。一九二五年に日本帝国主義はこの神社を朝鮮神宮と改称し、朝鮮人に参拝を強要する意図を表し始めた。しかし一九三〇年まで日本帝国主義は神社参拝を強調しなかったが、満州事変を起してから皇民化に向けた精神改造運動を進める一環として神社参拝を強要する政策に変えた。この時から日本帝国主義は朝鮮の全国地方に神社を建て始めた。一九三六年八月に日本帝国主義は「改定神社規則」（総督府令第七六号）を公布し、一つの面「郡の傘下の地方単位」に一社の神社を建てた。全国に新しく建てられた神社の数は一九三六年に五二四、一九三九年に五三〇、一九四三年に八五四であった。日本帝国主義は皇民化政策を強化するために扶余「ブヨ、忠清南道所在」

神宮の建設計画を立てた。その他、日本帝国主義は各家庭においても神棚を設置するよう強要し、天照大神のお守りを買って毎朝礼拝するように命じた。安東「アンドン 慶尚北道安東郡」にも安東邑新世洞嶺南山の麓（現在の円仏教堂のところに）に天照大神のための神社を建てた。

日本帝国主義の神社参拝強要の中に存在する全体主義的イデオロギーは長老教会との間で大きな葛藤があった。朝鮮イエス教長老教会で神社参拝問題が公式に取り上げられたのは一九一五年であった。その年の九月、全州の西門外「ソムンバク」教会で開かれた第四回総会（訳注3）において学生たちの祭式参与問題を扱った。総会は、祭式参与問題委員会を作り、委員としてアダムス（J. E. Adams）、テルミン（John V. N. Telmige）、李如漢を選出し、総督府と交渉するようにした。⁽³⁾ 満州事変と共に日本帝国主義が基督教学校に対して神社参拝を強要する政策をとると、長老教会はこの問題を頻繁に議論した。一九三二年九月第二一回総会はこの問題に対して「日曜学校の学生が神社及び諸祭式に参列することは、（……）できない」と決議し、対策委員会を通して総督府と交渉した。⁽⁴⁾ ところが第二二回総会（一九三三年）、第二三回総会（一九三四年）、第二四回総会（一九三五年）はこの問題に関して結論づけることなく議論を重ねるのみであった。⁽⁵⁾ そのうち、平壤の基督教系私立学校校長の神社参拝拒否事件が発生した。これに対して安州老会（訳注4）は臨時に会議を開き神社参拝拒否を決議した。⁽⁶⁾

3 創氏改名

日本帝国主義は一九三七年四月に「内鮮一体」を達成するため、親族及び相続関係法を改正する司法改定調査委員会を作った。この委員会を中心にして日本帝国主義は朝鮮人の名前を日本式に変える法を作り、一九三九年一月に「朝鮮民事令」（諸令第一九号）を改定した。この法令は朝鮮固有の姓名制を廃止し、日本式氏名制を設定して各家庭の戸

主が「氏」を定めようとしたものである。この法令は一九四〇年二月に施行され、これによって同年八月一〇日まで、各家庭は日本式名前を定めて当局に提出しなければならなかった。

日本帝国主義の皇国臣民化政策を拒否

李源永は、日本帝国主義の皇民化政策である朝鮮教育令改定・神社参拝強要・創氏改名をすべて拒否した。このうちの一つだけを拒否してもとても難しい状況であったのだが、彼は三つすべてを拒否した。これによって彼と彼の家族に冷たく厳しい風が吹き始めた。牧会していた「慶尚北道安東郡所在」安基教会から追い出され、老会からは牧師職を免職され、牧師館から追い出された彼の家族は人里離れた——現在の安東放送局付近——山の中で暮らさなければならなかった。

社会から完全に断絶された状況で彼らは疎外と経済的苦痛により一日一日をまるで千年のように耐えて生活しなければならなかった。李源永はこの時から光復「一九四五年八月一日」まで四回警察署に拘束され、その度に過酷な拷問を受けなければならなかった。病気による保釈で暫く監獄から出た期間も監獄生活と違いはなかった。彼の生活は一つ一つ監視され、行動の半径を居住地から五里（二キロ）以内に制限されたため、言わば「座り込んだ懲役」「ずっと座り込んでの監獄生活」を耐えなければならなかった。さらに朝鮮総督府警務局「朝鮮で、「特高」の正式名」の刑事たちが彼の家の入り口で監視していたのである。

1 預言者的説教

長老教会の總會「日本の「大会」と同様」が日本帝国主義の神社参拝の強要に直面して難関に逢着していた時に、李源永は一九三七年五月「二七日―三一日」に開かれた第三一回慶安老会の定期会議で、總會代議員たちに懸念を込めて説教した。五月二八日午前の祈祷会時間に、彼は旧約聖書ヨナ書一章一―五節を朗読し「ヨナからの警告」という題で説教した。翌日午後二時の集いでヨナ書二章全部を朗読し、「ヨナの教え」という題で説教した。その翌日（三〇日）午後二時の集いにもヨナ書四章全体を朗読し、「神の譴責」という題で説教した。⁽⁷⁾

このように李源永は三日間連続して毎日一回講壇で旧約聖書ヨナ書を一章ずつ朗読し説教したが、これは慶安老会と長老教会總會が預言者ヨナのようになるという心配があつたからである。つまり神の命令をよく知っているにもかかわらず、その旨に従わずに「不従順」であつたヨナ、自分の罪によつて船が砕けんばかりとなつても、「船底に降りて横になりぐつすり」と寝込んでいた⁽⁸⁾ヨナに関して、彼は説教したのである。この説教を通して彼が証言したかつたことは、第一に神社参拝強要に直面している朝鮮教会は神の御心がどこにあるかよく見極めること、第二に神の御心において迫ってくる困難と苦難を如何なる場合においても避けて逃げないこと、第三に教会が神の御顔から逃れようとするところによつて、この民族全体が大風に遭うかと心配であるということ、である。決して神社参拝強要に屈服してはならないという警告であつた。

しかし、李源永が神社参拝の拒否をしたことは、日本人に対する憎悪とはつながらなかつた。例えば、安基教会の日誌によれば、その年の秋（一九三七年九月五日）に国家のための特別祈祷会を開催したことを、個人的な対話の時にも、人との対話においても彼が日本人に対して軽蔑語を使わなかつたということがあげられる。

2 一九三八年、改定された朝鮮教育令を拒否

日本帝国主義の皇民化政策に対する李源永の拒否と抵抗は家庭から始まった。一九三八年三月に日本帝国主義が朝鮮教育令を改編して以降、学校教育の内容が大きく変わった。そこで李源永は子どもたちを学校に通わせなかった。普通学校四年生であった貞信「ジョンシン」と二年生であった貞吉「ジョンギル」には登校を中断させた⁽⁹⁾。普通学校に入学する貞順（ジョンスン）と貞玉（ジョンオク）は入学式さえ参列しなかった。李源永は授業の代わりに学校の教科課程に沿って家で教育をさせた。彼が教えた科目は聖書（暗唱）・国文・漢文・算数・修身・習字などであった。この時彼は日本語の教科書を購入して子どもたちに日本語を教えた。日本を知らなければ植民地の状況を克服することができないと判断したからである。

同年六月の初旬、李源永は、全く予想しなかった状況が生まれ、急に安息教会の牧会をやめなければならなくなった。「牧会中止」の圧力を避けることができなかったのである。六月八日水曜日夜の祈禱会で彼は最後の説教をした。講壇に立った彼は新約ヘブル書四章一四〜一六節を本文として「信仰をかたく守ろうではないか」という題で説教した。日本帝国主義の皇民化政策が今や民族精神を抹殺し信仰の精神を壊そうとしているこの時代に生きる信徒たちは信仰の道から逸れないで信仰の真理をかたく守るべきだと説教したのであろう。この説教後、彼は信徒たちに別れの挨拶をすることができず、教会を離れなければならなかった。

強制的に牧会の中止を余儀なくされた李源永は、少なくとも一年前から自分にこのような事態が来ると予想していたと思われる。一年前に老会の席上で預言者ヨナについて説教し、彼はこのようなことがいつか来ると予想した。しかも日本帝国主義の当局がいきなり圧力を加え牧会を中止させた背景にはどのような理由があったのかわからない点があ

る。安基教会の日誌を見ると、「著者は当時の緊迫した状況を説明しようとする。（訳注6）を参照されたい。」そこには同年六月三日から八日まで劉載奇（ユジェギ）牧師による「役員会修養会」を開催するという知らせが記されている。劉載奇は安基教会での修養会の最後の日である六月八日に「農友会事件」で当局に逮捕され拘束されたと推定できる。李源永もこの日の説教を最後にして安基教会を離れなければならないかった。このように六月八日に一人は警察に逮捕され、もう一人は最後に説教壇に立ったということに注目すれば、李源永の牧会中止は彼が農友会事件に係わっていたと当局が疑っていたと推察できる。農友会とは、劉載奇が「慶尚北道義成郡所在の」義成教会において作った農村研究の集いであり、農村協同組合を形成する運動団体であった。しかし当局はこの団体が基督教社会主義を広げ朝鮮独立を達成しようとしていると見なして、劉載奇に「朝鮮基督教徒の独立陰謀」の容疑を負わせ、治安維持法違反で逮捕した⁽¹¹⁾。「これが農友会事件である」。しかし李源永の場合は劉載奇のように治安維持法違反で逮捕するほどの手がかりはなかったが、少なくとも独立陰謀のために集まる場所（役員会修養会）を提供した者だという理由で、牧会を中止させたのではないかと思われる。

農友会事件は日本帝国主義が「捏造した陰謀事件」としてよく知られている⁽¹²⁾。農友会事件との関連で劉載奇以外に朱基徹「ジュギ Chol」、李裕澤「イユテック」、宋泳吉「ソンヨンギル」、朴鶴田「パクハクジョン」が逮捕され、この事件のすぐ前に鄭一永、権重河が義成警察署に拘束された。権重河はこの時の拷問によつて死亡した。前章「第四章」で述べたように、日本帝国主義は長老教会の農村運動が独立運動に発展していくと見ていた。劉載奇は長老教總會農村部幹事で農村運動の核心人物であった。朴鶴田は劉載奇と農村研究会を組織した人物である。李源永も慶安老会の中の農村運動の指導者として監視の対象となった。このように日本帝国主義は抗日前歴のない教会指導者たちを監視して、これから本格化される皇民化政策に抵抗する人物らを振り分けて、あらかじめ影響の拡がりを遮断したのであろう。

李源永とその家族は牧師館を離れて市内から一〇里（四キロ）程度の距離で、家屋が殆どない山間に移住した。彼は

山間の奥にある静かな場所を「五福土村」と名付けた。昼は通り過ぎる人もなく、夜は野の獣が出てきて農作物を荒らすような場所であつた。ここで彼は子どもたちと一緒に作った土のブロックで部屋が二つある草葺きの家を建てた。彼と家族は経済的に貧しく苦しい生活をした。それだけではない。彼の家族は警察から「監視の下にある家」と呼ばれ、子どもたちは友人を作ることもできなかった。このような苦痛は経済的貧しさと同様に彼にとって耐え難いことであつた。

一九三八年二月、日本帝国主義はキリスト教に対する指導方針を立てた。その一つが教会に対して露骨に神社参拝を強要し始めたことである。このような日本帝国主義の圧力の下、一九三八年二月に長老教会の平北老会「朝鮮半島北西地域である平安北道の老会」が神社参拝を可決し、同年九月までに全国二三の老会「以下の「老会」は日本の「中会」と同様」のうち一七の老会が神社参拝を決議した。同月に開かれた第二七回長老教会総会は神社参拝容認を可決し「神社は宗教ではなく国家儀式」と認め、これからは「皇国臣民」としてその本分を尽くすために「国民精神動員」に参与するということで一致した。長老教会は日本帝国主義の強圧によつて仕方なく決議したが、日本帝国主義の皇民化政策に積極的に協力すると約束した。長老教会はこの時から日本帝国主義の皇民化政策は勿論のこと、日本の戦争遂行に協力しなければならなくなつた。⁽¹³⁾慶安老会はこのような総会の決議を第三三回定期老会（一九三八年一二月）において受け取つたと見られる。⁽¹⁴⁾慶安老会はそれと共に老会の名前を朝鮮イエス教長老会から「基督教朝鮮長老会」に変えたと決議した。⁽¹⁵⁾

この時老会は李源永に対して最も深刻な決議をした。慶安老会は「当局の命令」という理由で、彼を牧師職から「辞職」させると決議した。⁽¹⁶⁾既に教会を離れて五福土村に入つて教会と交流せず生活していた彼に、日本帝国主義は老会の手を借りて、李と信徒とのつながりを切つてしまつたのである。信徒たちに最後の挨拶さえできず追い出された李が牧師職も強制的に奪われたのである。牧師の免職は彼にとって死刑の判決より酷いものであつた。なぜなら彼は西大門刑

務所で服役していた間にキリスト教信仰を通して国家と民族の新しい希望を見つけ、その希望により牧会者となったからである。しかし、日本帝国主義は彼を教会から追い出したことに満足せず、牧師職まで剥奪したのである。彼は最後の希望さえ奪われたのである。

3 一九三九年、第一次予備検束

一九三九年五月に李源永は「予備検束の形態」で安東警察署に三ヶ月間拘禁された。すでにあらゆる希望を失い屍のようになった李を日本帝国主義は、さらに拘束したのである。李は警察署の中で言葉にできないほどの拷問を受け、半死半生となって釈放された。第一次拘禁の時に殉教を覚悟した李源永は食事を隣人に分けたりしていた。体が衰弱すると警察は家族に飲食物を入れさせるようにしたが、彼は外からの飲食物は口にできなかった。既に五三歳の初老に入った李の体は極度に衰弱した。さらに拷問（特に殴打）に耐えきれず肋膜炎に罹ったが、重病を患っている彼に拷問と殴打は絶え間なかった。彼の体は全身から力が抜ける状態になってしまった。

警察は彼が死んだと思つて留置場の廊下に引っ張り出して、その上に麻袋を被せて置いた。そして家族に遺体を収容するよう通知した。家族たちは驚き慌てて警察署に行き、遺体を「安東市にある」聖召病院に収容したが、幸いに李源永の命はまだあった。彼の病床を家族と宣教師たちが見守った。子どもたちは父がもしや世を去るのではないかと泣き続け、宣教師たちは臨終の準備をしていた。その時、李源永は静かな声で讃美歌「わがたましいの したいまつる（……）」「讃美歌五一二」を歌つて欲しいと願った。皆、涙をもつて讃美歌を歌った。李源永は子どもたちを近く呼び彼らに聞いた。「あなたたちは私が留置場から釈放されるように祈ったか、または、そこで死ぬことを祈ったか」。子女たちは答えた。「私たちは父が留置場から釈放されるよう祈りました」。そうすると、李源永が「それは神の御心ではな

いから悔い改めなさい」と言つた。

「安東地方のキリスト教病院である」聖召病院で約二〇日間入院治療を受ける間に李源永の健康は少しずつ回復した。しかし健康が回復するにつれ彼は心を痛めた。なぜなら、留置場の中で殉教せず、生きてそこから出たからである。さらに囲りの人々は李源永の苦痛と苦難をそのまま見ることができず、むしろ神社参拝をして自由の身になるよう勧めた。これに対して李源永は「退け、サタン」と叫んだ。

李源永はその年の七月ごろに釈放された。多くの人々は八月三一日には既に釈放されていたと知っている。彼が八月六日（日曜日）に安基教会を訪問したこと、またそれより彼の健康が回復されるまで病院に入院した期間を計算してみると、遅くとも七月中旬以前に釈放されたであろう。しかし重要なことは彼が警察署から釈放されて安基教会を訪問できるような許可を得たということである。五福土村に追い出されて一年以上、顔も見ることができなかった信徒たちに会える李の喜びは、警察署で受けた過酷な拷問の後遺症を少し和らげたであろう。その日の礼拝が終わった後、礼拝堂の後ろで静かに座っていた李源永は、教会の人々に五分間話す時間を要請した。そしてその時に信徒たちと別れの挨拶をすることができたのである。⁽¹⁷⁾

留置場から解放された李源永は生計を立てるために、妻の実家が用意してくれた五〇〇坪規模の桃の畑を耕した。⁽¹⁸⁾ 彼は五福土村を越えて外に行くことが当局によつて認められなかったため、そこで生産した桃を業者に売るしかなかった。⁽¹⁹⁾ 李源永は桃を売った金額の十分の一の献金を必ずとり置き、夜中に尋ねてくる神学生たちにあずけた。また桃の木の間にはピーナッツやネギを植え、一部は食料として使い、また一部は売った。

隣人と断絶し常に監視を受けつつ生活していたが、このような状況においても密かに彼の家を訪問する人々がいた。彼ら（金ソンジ・李クアンホら）は夜中に尋ねてきて李源永と一緒に未明まで教会と国家のために涙をもつて祈りを捧げた。安基教会の信徒たちの中にも監視の目を避けて卵や生鮮食品などを持って訪問する人々がおり、宣教師たちも夜

中に山を越えて訪問した。

病気による保釈で監獄を出た李源永は、子どもたちの教育に力を入れた。前述のように彼は子どもたちに午前中は朝鮮語・日本語・算数・漢文・習字・信仰（十戒、使徒信条）などを教え、聖句暗唱（特にヨハネ三の一六、ガラテヤ五の二二―二三、一コリント一三の一三）をさせた。彼は子どもたちに日曜学校のテキストに出てくる五二週間の聖書の箇所を暗記させ、それを暗唱できるかどうかテストした。子どもたちは合格すれば賞として桃をもらったが、不合格ならば桃畑の雑草除去作業をした。このようにして学科の勉強が終わると、彼は子どもたちに野菜や山菜を採集させた。そして夜になると、昼間にどれぐらい学習したかテストを行い、子どもたち同士に競争させ、習ったことは暗記させた。その後、一日の生活についてお互いに対話する時間を設けた。

何人かの安基教会の信徒たちが牧師の後を追うように苦難を受けた。李源永が別れの挨拶を告げた後一週間が過ぎて（八月一三日）、弟の源世（ウォンセ）と甥の東昌（ドンチャン）が今までの教会の職（班長、日曜学校の教師）を自ら辞めた。⁽²⁰⁾ 源世と彼の弟源植（ウォンシク）は慶州の南陽面所在のヨンミョン学校の教師であったが、日本帝国主義の皇民化教育に反対した理由で強制的に退職をさせられた。⁽²¹⁾ そしてこの教会の執事李寿永・寿元兄弟も牧師の後を追った。⁽²²⁾ 李寿永は神社参拝を拒否したことによって拷問を受け、その後遺症で精神錯乱を起こした。寿元も同じ理由で拷問を受け、その後遺症によって障害者となった。⁽²³⁾ 李源永と同じ志を持った同僚牧師も数人いた。その年九月に朴忠洛（当時、栄州第一教会の長老）、一〇月二日には金鎮浩（栄州第一教会の牧師）が警察署に拘束され収監された。⁽²⁴⁾ また田桂元・権秀盈・イムヒスなど大勢の牧師たちが李源永と共に苦難の道を歩んだ。

しかし一九三九年に開かれた朝鮮イエス教長老会総会は「国民精神総動員朝鮮イエス教長老会連盟」を結成し、日本

帝国主義の国家政策の遂行に協力することを決議した。また総会は各老会毎に支部を結成してその政策に協力するよう指示した。総会の決議にしたがつて安東の慶安老会も一九三九年一月に開かれた第三四回老会で「国民精神総動員朝鮮イエス教長老会慶安老会連盟」を結成した。⁽²⁵⁾この結成式の次第は、宮城遙拝・皇国臣民誓詞斉唱・讚美・祈り・聖書朗読・祝辞・天皇陛下万歳三唱・国防献金・祝祷などであった。第三四回の会期中に老会において、李源永とその家族が居住していた牧師館（土地一八〇坪）を慶安老会維持財団に寄付することが決定された。⁽²⁶⁾

4 一九四〇年、創氏改名拒否と第二次予備検束

日本帝国主義は一九四〇年二月に「創氏改名」を施行した。この命令を喜んだ人は一人もいなかったと思われる。しかもこの命令を拒否できる程の勇氣を持った人は殆どいなかった。したがって、この法令が提示した期限（一九四〇年八月一〇日）までに、約八〇%（約三二二万戸）の朝鮮の家庭が日本式の名前に変えて当局に届けを提出したのである。教会も同様であった。一九四〇年一月二月に集まった第三五回慶安老会の会議参席者たちは、創氏改名した名前と呼ばれた。

李源永は創氏改名も拒否した。しかも神社参拝を拒否したキリスト者のうち、創氏改名に従った人物は少なくなかった。韓相東「ハンサンドン」、朱南高「ジュナング」、安利淑「アンイスク」などがそうであった。彼らは神社参拝は徹底的に拒否したが、創氏改名には従って各々の名前を西原相東、新武南高、安川利淑に変えた。意外なことには神社参拝の拒否によつて過酷な拷問を受けた朱基徹「ジュギチョル」も、名前を新川基徹に変えたのである。⁽²⁷⁾恐らく彼らは神社参拝を第一戒を犯す罪惡と見なした反面、創氏改名は信仰の次元ではなく個人の良心の問題と見なしたからだと思う。⁽²⁸⁾このような解釈が神社参拝だけを拒否し「創氏改名には従った」キリスト者たちに対する否定的評価につなが

ないように注意すべきであろう。すなわち、彼ら「創氏改名をした人々」は民族意識が希薄で民族独立に対する意志が欠けていて、専ら信仰の良心のみ守ろうとした、という解釈である。⁽²⁹⁾しかし李源永と彼らとの間にはその信念の体系において大きな差がある。彼らは教会の社会参与や政治介入に対しては消極的で、良心に反しかつ聖書の教え（第一戒）に反する神社参拝のみを拒否したのである。⁽³⁰⁾李源永は、信仰の良心と聖書の真理を守るといふ信念の体系には民族の種をなくそうとする創氏改名の拒否と、民族意識の根本を抜こうとする朝鮮教育令改定の拒否なども含まれると考えていた。このように神社参拝を拒否した両者の間で相違が出ている。⁽³¹⁾ここで確認できることは、李源永の中には三・一運動の民族独立という信念が彼の信仰においても連綿と生きていたということである。

李源永は一九四〇年八月二〇日に第二次予備検束を受けた。日本帝国主義当局が検束した意図の詳細は把握できないが、そこには彼が「創氏改名を拒否し」皇民化政策に背いているという判断があつたのではないかと推察する。日本警察は家族との面談を禁止し、飲食物も持ち込まないように指示した。この時期は、彼の家族を経済的に支援し精神的にも励ましてきた米国の宣教師たちが本国に戻る時期であつた。李が留置場にてできることは聖書を読むことだけであり、彼は聖書の黙想に没頭した。警察はそうする彼を放置しなかつた。前回のようにならゆる種類の拷問と殴打を加えた。万年筆を指の間に入れてひねる拷問、唐辛子を鼻に入れる拷問、水の拷問、体を逆さまにつり上げる拷問など苦痛を伴うあらゆる拷問は、ついに彼の体を壊した。拷問によつて肺炎に罹つた彼はその年の一二月三一日に病氣による保釈となり、釈放された。

その頃朝鮮イエス教長老教会総会は一九四〇年八月までに七三一の愛国班を組織した。これを通じて総会は戦勝お祝い会、武運長久祈禱会、戦死兵慰問金、戦傷者慰問、遺族慰問、国防献金、鎗器「金属食器」献納、時局講演などの

事業を展開して戦時の施策に協力した。⁽³²⁾慶安老会もその年の一二月に開催された定期老会（第三五回）で各教会に神棚を奉安することを可決し、警察と事前連絡を取ることまで決議した。⁽³³⁾また老会は日本帝国主義が一つの面「地方の単位」に一つの教会しか認めないという政策に呼応し、教会の合併を推進した。老会は多数の礼拝堂と土地を売ってそのお金で国防献金をした。⁽³⁴⁾それでもこれが割り当てられた金額に至らなかったもので、老会はい再び各教会宛に金額を割り当てた。国防献金の割り当ては中央教会千円、城内教会二千円、大竜山教会二〇円、豆田教会一〇円、竜上教会五〇円、幕現教会五〇円、ガウン教会三〇円、オウン教会二五〇円、バクサン教会一〇円、新岩教会三〇円（合計三、三六〇円）などであった。老会は信徒たちにも個別的に国防献金をするように決議し、献金を一人当たり一円以上と定めた。

5 一九四一—一九四二年、第三次予備検束

五富士村にて侘びしく生活していた李源永とその家族に、天から大きな喜びの賜物が与えられた。一九四一年四月二六日に息子ヨハネが生まれたのである。李源永が五五歳にして授かった子である。しかしこの喜びを分かち合うのも僅かな時間だけであった。その年七月一日に彼は再び警察署に収監された。⁽³⁵⁾不安と恐怖で泣いている子どもたちと乳児を抱いている妻を五富士村に残したまま、警察署に拘禁されたのである。第三次予備検束であった。今回は彼の家族にも知られないように、浦港、盈徳、慶山「以上、慶尚北道の地域」などいろいろな警察署に移された。日本帝国主義がそのようにした理由は、いろいろな警察署を移送しながら苦痛と拷問を受けさせ、彼を屈服させるためであった。⁽³⁶⁾寒い冬、冷たい留置場の床で過ごした彼は肺炎を再発し、一九四二年三月二日に病気による保釈となり、釈放された。

安東と全国の長老教会は、李源永がいろいろな警察署を移されながら拘禁されている間、日本帝国主義の皇民化政策

に引き続き屈辱的に屈服していった。慶安老会第三六回定期老会（一九四一年六月）は神社参拝をもつて開会したが、この時から教会は全体主義的国家イデオロギーの前に完全に跪き始めた。老会は当時流行した言葉「日本的基督教」⁽³⁷⁾を樹立するために足並みを揃えた。これは、教会が戦時体制に動員される最初の段階であった。第二次大戦の状況で慶安老会は戦争物資を支援するためにその年九月に各教会に「銃器」「金属食器」献納主日」を定め銃器を集めた。その年一月に慶安老会は臨時老会を開いて一月六日を「愛国機献納主日」「当時、朝鮮の教会は日本に戦闘機を献納しようとした」と定め、その日に献金するようにした。ここで集まった献金の総額は三、四一八円六五銭であった。また老会では日本帝国主義の侵略戦争を「聖なる戦争（聖戦）」と呼び、一九四二年一月には各教会に公文を発送して「戦勝祈祷会」を開くよう指示した。戦争が絶頂に達した一九四二年に日本帝国主義は軍事募集制度を徴兵制に変えた。これに従って慶安老会第三七回定期老会（一九四二年六月）は老会期間中「徴兵制実施お祝い会」を開いた。

慶安老会が日本帝国主義の戦争遂行のためにあらゆる協力をしたにもかかわらず、日本帝国主義は第三八回定期老会（一九四二年二月一五―一八日）をついに開会中止にさせた。そして「日本帝国主義からの強圧的な教団編入調整作業」によって慶安老会は「慶北教区団」^(訳注)に所属させた。慶安老会はその名前が消えたまま、その後三年間（八・一五光復まで）どんな集会も開くことがなかった。安基教会も新世教会と共に法上洞教会に「合同」され、この二つの教会の建物と土地を一万四千元で売却し、このうち九千元を国防献金に捧げた。⁽³⁸⁾その他、安東の数多くの教会が町の単位で統合された。例えば録田洞には教会が五箇所あったが、一箇所に強制的に統合されたのである。

6 一九四五年、第四次予備検束

一九四五年五月二日に李源永はまた警察署に拘禁された。今回は大勢の人々と一緒に同じ部屋に収監されたが、こ

の人々のうちには神社参拝を拒否した罪に問われて収監された信徒たち（主に長老と牧師たちも）も何人かいた。また安東農林高等学校の学生たちもいた。⁽³⁹⁾その当時、自然に交わりが出来、李源永は自分の食事を残してこの人々に分けた。また留置場には南京虫がいて人々は苦しんだが、彼は南京虫が最も出てくる出入り口に横たわって、学生たちの周囲に南京虫が行かないようにし、自分の体を犠牲にして保護したのである。

皇国臣民化政策を拒否した神学的根拠

李源永が皇民化政策と神社参拝を拒否した神学的根拠がどこにあったかについて資料を探してみた。一般的に神社参拝を拒否した教会指導者たちの神学的根拠は終末思想にあつて、さらに前千年王国説終末論に根拠づけられている。これとの関連で李源永が安息教会の牧会時代に用いた『新約全書』（一九三〇年刊行）を調べたが、この扉の余白に描いた図表で「終末論図表」を見つけた。この図表は千年王国、すなわち、終わりの時にキリストが王として再臨して世を支配する王国に関して説明したものである。⁽⁴⁰⁾この図表と殆ど同様の内容が、彼の平壤長老会神学大学の在学時代の講義録『ダニエル書講解』に記されている。また彼の遺品蔵書の中にはブラックストンの『イエスの再臨』、アードマンの『ダニエル書』（昭和二年発行）、金ジョンヒョンの『末世論』（一九二八年）、李明直の『耶蘇再臨講話』（一九二七年、一九三〇年再発行）があつた。

李源永が描いた図表と他の全ての資料は一樣にデイスペンション主義〔Dispensationalism〕^(訳注8)前千年王国説を表している。この終末論がどのようなものであるかを把握するためには、終末論が教会でどのように受けとめられたのかを見る必要がある。一九世紀後半米国で第三次覚醒運動が起こり、この時期に千年王国運動が起こった。この運動は

ブラックストンの『イエスの再臨』という著書によつて大衆の中に広がり、ブルックスとスコフィールドによつて神学的に体系が整えられた。このようなデイスペンセーション主義の前千年王国説が、韓国にいた米国宣教師たちの翻訳を通じて紹介された。例えばゲイル (Gale) がブラックストンの『イエスの再臨』(一九二二)を、裴偉良 (Baird) はブルックス『主再臨論』(一九二二)をハングルで翻訳した。したがつて平壤長老会神学大学「現ソウル長老会神学大学の前身」では——李源永の在学時代——デイスペンセーション主義の前千年王国説が主に紹介されていた。牧会者たちのうちでデイスペンセーション主義の前千年王国説を教会に紹介し強調した人には吉善宙、李明直、金応朝がいた。牧会者たちの千年王国の宣布と説明は信徒たちに植民地状況の試練と苦痛を勝ち取ることでできる終末論的希望を与えたのである。

前千年王国説終末論に関してさらに考察すると、草創期韓国プロテスタント教会に紹介された前千年王国説は大きく二つの流れがあつた。デイスペンセーション主義の前千年王国説と歴史的前千年王国説である。両者の共通点はキリストの再臨の後、この世に千年王国が成立するということである。両者の相違点は、携挙と教会の大艱難通過に対して違う見解を持つことである。デイスペンセーション主義の前千年王国説は大艱難が来る前に携挙がある。したがつて教会は大艱難に遭わないと主張するが、一方、歴史的前千年王国説は大艱難の最後について携挙があるため、教会が大艱難に遭うと主張する。デイスペンセーション主義の前千年王国説はイエスの再臨が二回、つまり最初の空中の再臨と二番目の地上の再臨があると主張した。最初の再臨は死んだ人たちと生き残っている人たちが空中で主と出会い(小羊の婚宴)地上では七年大艱難(七年間の反キリストの統治)に遭い、この艱難の最後にキリストが再び地上に再臨しこれと共にハルマゲドン戦争が起きる。その後、サタンは縛られ底なしの淵に投げ入れられ、千年王国が始まると見なした。これに対して歴史的前千年王国説はイエスの再臨は地上再臨一回と主張し空中再臨を受け入れなかった。しかし七年大艱難とハルマゲドン戦争などに関する見解はデイスペンセーション主義の前千年王国説の主張と同様である。前者はキ

リストの迫った再臨を信じ時代の徴などが再臨の初めの段階、つまり携拳以降に成し遂げられると見なした。一方後者は差し迫ったキリストの再臨を否認し再臨以前に時代の徴が成就されると見なした。前者は千年王国の聖書の根拠を主に旧約聖書に置いており、後者はこれの根拠をただ新約聖書に置いている。

神社参拝を拒否した教会指導者たちの終末思想は、その多くがデイスペンセーション主義の前千年王国説であった。彼らはイエスの再臨を期待し、再臨と共に成っていく新しい天と新しい地を待ち望む、つまり神社参拝のような空しいものを拝することで戒めを犯さず、むしろ戒めを最後まで守りイエスの再臨を迎える、と強調した。例えば李基先は一九三〇年代に起きた戦争、天災地変（干ばつ、虫被害など）、流行性の病気などはすべて末世に起こる現象であり、それに神社参拝の強要が加えられて末世が迫っていたと見なした。そして彼は今やまもなくキリストが再臨し日本帝国を含む現在存在しているすべての国家と組織を一緒にし、その上にキリストを王とする千年王国が建設されると堅く確信したのである。⁽⁴¹⁾

デイスペンセーション主義の終末思想は旧約ダニエル書を基盤として偶像崇拜拒否とつながっている。すなわち、ダニエル書に基づいた終末論的歴史意識において、神社参拝を偶像崇拜と同一視したのである。神社参拝を拒否した人の中には（蔡ジョンミン、金キョンヒなど）、今の時代が旧約のバビロン時代と同一の様相を表していると見る人がいた。それらの人々は日本をバビロンと見なし、朝鮮はユダヤであると見なした。神社参拝を拒否する朝鮮人を監獄に入れ拷問することは、まるで「バビロンの偶像崇拜を拒否したユダヤ人たちが火の燃える炉に入れること」と見なされた。⁽⁴²⁾従って彼らには神社参拝が国家儀式ではなく、十戒の第一戒に反する明白な偶像崇拜であると判つたのである。李基先はこの世でただやハウエ神が唯一の絶対者であり彼以外にどんな存在もその地位に昇ることはできないと強調した。従って「日本の天皇も不完全な人間に過ぎない。しかもそれに仕えている日本の神宮と神社はすべて偽りの神に仕えていることで、これを礼拝する行為はモーセの十戒のうち、偶像を崇拜してはならない、という戒めに違反している」と

言った⁽⁴³⁾。全ケオンは、安東の印魯節 (Rodger E. Winn) 記念聖書学校を卒業 (昭和十三年、一九三八年) し、イハ洞教会の執事として伝道者の仕事をしていた。恐らく李源永と終末論思想が同じであったと推定される全は、日曜学校の聖書勉強時間や礼拝時間の説教を通して「神社と神宮は偶像に過ぎず、神社参拝は偶像崇拜としてモーセの十戒 (出エジプト第二〇章) に違反すること」と言った⁽⁴⁴⁾。このようなデイスペンセーション主義的終末思想と第一戒を堅く守ろうとするキリスト者たちの信仰意志を、当局は社会秩序を壊し、治安維持を妨害し、政治的にも不純であると見ていたのである。さらに彼らは「現存社会制度及び国家形態は悪魔の組織であるため間もないうちにキリストの再臨によつて (既存社会制度と国家が) 壊され、この代わりにキリストが王として千年王国を建設するであろう」と叫んだ。日本帝国主義はこれらを保安法 (第七条)⁽⁴⁵⁾、不敬の罪 (刑法第七十四条第一項第五五条)⁽⁴⁶⁾と扇動罪 (刑法第五四条第一項の前半、第一〇条に第七四条一項)⁽⁴⁷⁾に該当する罪の行為と見なしたのである⁽⁴⁸⁾。

これまでの考察を通して出てくる暫定的結論は、李源永の日本帝国主義の皇民化政策を拒否した根拠となる思想は終末論であり、それはデイスペンセーション主義の前千年王国説からそれほど離れていなかったと見られることである。

生き殉教者の妻、牧師夫人金其出⁽⁴⁹⁾

李源永とその家族が五福士村で生活していた六年間、家事と子どもの養育と教育問題は全て牧師夫人金其出 (キムキチュル、一八九八—一九五〇) の肩に掛かっていた。夫が警察署に拘禁されている間、金其出は毎日礼拝を捧げた。五福士村は人々が住んでいない深い谷間であったため、博徒たちが密かに来て賭博をし、不良者たちが喧嘩をするようなところであった。この物騒な生活の場を守るため、金其出は「六人の娘」を養育する母として夜に寝ることなく、家の

周辺を見守る時が多くあった。

牧師夫人金其出にとつて最も辛かったことは食べ物を用意することであつた。米が全然ない状況であつて、一日三回のお粥で食べつないできた。粟、よもぎ、豆の葉っぱなど食べ物の材料となるものはすべて入れてお粥を作つた。しかしそれさえ足りなかつたため、水を多めにして薄いお粥を作らなければならなかつた。時々家族たちは食べ物のために山中に入つて松の木の皮を取つて餅を作つたりお粥を作つた。たまたま精米所から屑米をもらつたときには、それでお粥を作つた。このように薄いお粥で食べつないできたため、成長期にある子どもたちは常にお腹が空いていた。子どもたちの願ひは米のご飯を食べることであつた。ひもじい腹を満たすために子どもたちは密かにキッチンに入つて、母の分として残しておいたお粥を一、二さじ食べたこともあつた。そうになると母の食べものはなくなり、そのため食事ができない日も多かつた。末子ヨハネが乳をくれと泣いたが、乳が出るはずがなかつた。

家長の役割も担わざるを得なかつた金其出は糧を求めるためにあらゆる労働をした。当時安東は綿花、大麻などを生産する地域として有名であり、特に蚕業が発達していた。金其出は蚕を飼つて絹をとり、機で紬を織つて食糧と交換する時もあつた。蚕を飼つて絹を織るまでには長い時間と努力が必要であつたし、織機の前に座つて機で紬を織るまでには長い労働過程が必要であつた。この過程で子どもたちの手も必要であつた。金其出は子どもたちを連れて綿花の畑に行つて主人の刈り入れの終わった畑で綿のまだ開いていない実を手で割り、綿花を刈り入れた。そして竹で弓を作つて畑で刈り入れた綿花から紬を織つた。毎朝家庭礼拝を捧げた後に子どもたちは他の家の綿花を手で割る仕事をしその代価で種をもらつて来た。綿花の種は暖房用の焚き口の火をつける時に必要であつた。子どもたちは円く座つて綿花を一つ一つ割つたが、その作業が終わると爪がひりひりして痛かつた。子どもたちの仕事はさらにあつた。子どもたちは母が開墾しておいた畑に行つて草を抜くなど力仕事をした。金其出は家族たちの食料を得るために他の家に行つて労働したり、長い髪の毛をハサミで切つてそれを売り米三升と交換したこともあつた。

山の中の家庭集会

安基教会から追い出され山の中で過ごす間に李源永は家庭で礼拝し牧会とした。毎朝晩、彼は家庭礼拝をした。勿論数ヶ月間警察署で収監されていた期間には礼拝することができなかった。すべての家族が部屋の中に座って讚美し聖書を読み祈った後、李源永が説教するという次第で礼拝が守られた。子どもたちは長く祈ることができなかったため、父（李源永）が祈りを教えた。子どもたちは一言で祈りを捧げ、「神様、よく勉強ができるようにして下さい」、「父母に従順するように」、「兄弟間で仲良くするように」このような祈りをし、父母が最後の祈りを捧げる形であった。

山の中の家庭集会時代に作成した彼の「自筆説教目録」（一九三八年七月から一九四五年初めまで）には、総数三二四篇の説教題と聖書箇所が記録されている。この時期の説教は以前より新約聖書に偏っている。彼は説教本文を新約聖書と旧約聖書から一〇対一の比率で選んだ。また、旧約聖書の本文の選択においても律法書（三二篇）に集中しており、預言書（二篇）と歴史書（一篇）は相対的に少なく、詩歌書は見あたらない。新約聖書から選ばれた本文は福音書（二五八篇）、パウロ書簡（七一篇）、ヘブル書と共同書簡（二三篇）、黙示録（二二篇）、歴史書（一〇篇）であり、以前の説教より黙示録から度々本文が選ばれた。この点は、彼が置かれている極限的な終末の状況を代弁している。

李源永は黙示録三章一節から六節を少なくとも四回以上説教している。そして説教の題を「衣を汚さなかった者は何人か」あるいは「サルデス教会」とした。説教題が示唆するように、彼の眼には黙示録のサルデス教会が今の朝鮮教会と同様に見えたであろう。当時の教会のように今の朝鮮教会も神社参拝の強要に屈服する「行為」で、「生きている」というのは名だけで、実は死んでいる」教会であると嘆いたであろう。このような死の状態にある教会において「衣を

汚さなかった」聖徒が何人残っているかを数えつつ、彼は心を痛めたであろう。⁵⁰ 同じ範疇で彼はルカによる福音書五章三七節から三九節の箇所を選び数回説教した。そして説教題を「新しい皮袋のような古い皮袋」にした。その説教題が示唆するように、今まで彼には、朝鮮教会が人の年齢に置き換えて若い青年期の「新しい皮袋」と見えたが、今やそれが「古い皮袋」と判った。彼は、古い皮袋に新しい葡萄酒を入れても皮袋が破れてしまうように、朝鮮の教会もそのように破れてしまったと判断したのである。このようにして朝鮮の教会の実情を把握しつつ教会に対して失望した彼は真の教会を探った。彼はこのような脈絡で四回以上マタイによる福音書一八章一五節から二〇節を本文にし、その題を「神の教会組織」と呼んでいる。彼はこれを本文にして真の教会を追求し、聖書通り僅か「二人または三人」が集まる所であるが「心一つにして求め」専らキリストの「名」によつて集まる所が真の教会だと確信したのである。このようにして李源永は多数が選択した神社参拝の道を歩まず、小さな群れであるがキリストの名によつて集まる神の御心を探すという所を追求したのである。これと同時に彼は「イエスの葡萄酒の譬え」（ヨハネ一五章一節から四節）を三回以上説教の本文とした。「ぶどうの枝が木につながっていなければ実を結ぶことができない」ように、「教会（信徒）がぶどうの木であるイエスのうちにいなければ、実を結ぶことができないだけでなく、神の審きをさけられない」と確信したのである。また彼は、一ペテロ四章一節から六節までを三回以上説教の本文とした。この本文のように、彼は「キリストの苦しみが福音の贈り物だ」と確信した。これによつて皇民化政策と神社参拝を拒否した彼の神学はキリスト論に基づいており、キリスト論に基づいて正しい教会論を追求した。また彼は牧会の草創期に度々説教の本文として選んでいたヘブル書一〇章一九節から二〇節を山の中の家庭集会においても随時に説教した。これを通じて彼は以前と同様に心一つにし神に「まことの礼拝」を捧げ、「永遠の命の道」を追求する家の教会を形成しようとしたのである。

山の中の生活は李源永にイスラエルの民がエジプトから出て「荒野の生活」を送ったことと喩えられた。彼は数回旧約聖書出エジプト記一六章一一節から三六節までを本文とした。イスラエルの民がエジプトの肉屋のそばで満腹しな

がら満足する奴隷生活より、むしろそこから離れて荒野の生活を選んだように、李源永の家族も日本帝国主義の植民地支配から脱して山の中で天から降りてくる糧（マナ）がなければ生き延びることができない中で、彼は信仰の良心を守り、心を平安にする生き方を選んだのである。

原注

- (1) 『韓国史二三、植民値時代の社会経済』ハンギル社、一九九四年、一五九頁「『한국사 一三、식민지시기의 사회경제』한길사」。
- (2) 『韓国基督教の歴史 II』基督教文社、一九九五年、二八五頁以下「『한국기독교의 역사 II』기독교문사」。
- (3) 『朝鮮イエス教長老会總會第四回会録』（一九一五）、三八—四〇頁「『조선예수교장로회총회제四회회록』」（以下、韓国語は初回だけ記す）。一九三〇年代以前の神社参拝問題に関しては以下を参照されたい。金承台「日本神道の浸透と一九一〇、一九二〇年代の『神社問題』」、『韓国史論第一六集』一九八七年、二七五—三四三頁「김승태 『일본신도의 침투와一九一〇、一九二〇년대의 신사 문제』」、『한국사론제一六집』。
- (4) 『朝鮮イエス教長老会總會第二一回会録』（一九三二）、三四頁。
- (5) 『朝鮮イエス教長老会總會第二二回会録』（一九三三）、九頁。『朝鮮イエス教長老会總會第二三回会録』（一九三四）、一一頁。『朝鮮イエス教長老会總會第二四回会録』（一九三五）、五三頁。
- (6) 『朝鮮日報』、一九三五・一二・四「『조선일보』」。
- (7) 『慶安老会第三二回会録』（一九三七・五・二七—三一）、一〇、一一、一六頁「『경안노회제三二회회록』」。
- (8) 李源永『聖書講解書冊』（一九三七・五・二八）「이원영 『성서강해서책』」。

(9) 李源永の四番目の娘ジョンギルの記憶によれば(二〇〇〇年五月に証言)「小学校二年(九歳)であつた一九三八年に父が日本語強調、神社参拝、東方ヨ拝、国旗掲揚などを強要する学校にこれ以上通わないと命じた」と言う。彼は当時学校の全ての生徒が安東教会のそばにあつた神社に参拝したと回想している。

(10) 『安基教会日誌』一九三五—一九三九(一九三八・六・一)「안기교회일지」。

(11) 「最近の朝鮮の治安状況」、「韓国独立運動史 五」国史編纂委員会、一九六九年、三二三頁「최근의 조선치안상황」、「한국의 독립운동사」국사편찬위원회」。

(12) 関庚培「殉教者朱基徹牧師」大韓基督教出版社、一九八四年、一九九頁「민정배 「순교자주기철목사」 대한기독교출판사」。

(13) 『韓国基督教の歴史Ⅱ』、三〇三頁。

(14) しかし『慶安老会第三三回会録』にはこれについての詳細な記録がない。慶安老会がいつ神社参拝を決議したかについては見解が多い。『慶安老会七〇年史』一八四頁に老会が臨時老会を開いて神社参拝を可決させたと記録されており、『安東教会八〇年史』一六六頁には第三三回定期老会が六月であると記録されているが、實際この老会は一二月に開かれた。

(15) 『慶安老会第三三回会録』(一九三八・一二・一三)、五四頁「경안노회제삼삼회회록」。

(16) 同上、五九頁。

(17) 『安基教会日誌』一九三五—一九三九(一九三九・八・六)「안기교회일지」。

(18) 「証言」、李ドンチャン、李貞順、(二〇〇〇・七・一四)。李源永の最初の夫人は結婚してから二年目に亡くなり、彼は再婚した。しかし世を去った夫人の男子兄弟と李源永の家族は継続して互いに往来し親しく過ごした。そういう環境だったので、彼の子女たちは血縁関係ではなかったが、おじと呼び、このおじが五福士村の土地を購入してくれた。

(19) この業者は当時安東教会の執事、金テキュであつたようである。

(20) 『安基教会日誌』一九三五—一九三九(一九三九・八・一三)。

(21) 李源植は一九四五年八・一五光復と共に復職し学校の校長として働き、退任した。

(22) 金乙東編『安東版独立史』名文社、一九八五年、一九四—一九五頁、三〇七—三〇八頁「김을동편 「안동판독립사」 명문사」。

(23) 「証言」、李ウシク、(二〇〇〇・五・二〇)。

(24) 裴興稷『鳳卿李源永牧師』、ボイス社、一九七六年、一〇五頁「배흥직『봉경이원영목사』 보이스사」。

(25) 『慶安老会第三四回会録』(一九三九・一二・一二)、七〇頁。

(26) 同上、八三頁。

(27) 閔庚培『殉教者朱基徹牧師』、二二八頁以下「민경배『순교자주기철목사』」。

(28) 崔薰「神社参拝と韓国再建教会の歴史的研究」、『韓国基督教と神社参拝問題』金承泰編、韓国基督教歴史研究所、一九九一年、一四〇頁「최훈「신사참배와한국재건교회역사적연구」,『한국기독교와신사참배문제』김종태편,한국기독교역사연구소」。

(29) 李ジング「神社参拝に対する朝鮮基督教界の対応様相研究」、『韓国基督教と神社参拝問題』、三三七―三三八頁「이진구「신사참배에대한조선기독교계의대응양상」,『한국기독교의신사참배문제』」。

(30) 同上、三四一頁。

朱基徹は元来日韓併合の当時風靡した民族の自覚意識を大きく受け止めていて、このような点で信仰の良心と政治意識とを堅持していたとする。その後彼は金益斗の説教を聞いた後から民族の現実と政治的な関心を遠ざけて教会内部の信仰に集中したとする。

(31) 金ヒゴン『安東の独立運動史』、三八一頁「김희곤「안동의독립운동사」」。

両班は絶対に自分の血筋を放棄できないという信念もあつたと思われる。これとの関連で退溪の子孫である芸安のキョ洞の李ヒョング(一八六二―一九四〇)は創氏改名に抵抗して自決した。旧大韓帝国の末期の義兵抗争に参加した彼は日本帝国主義の治下で国なき民と自称しつつ山村を転々とした。日本帝国主義が創氏改名を強要すると彼は断食に入り、三六日となる一九四〇年八月六日に息が絶えた。

(32) 『朝鮮イエス教長老老会総会第二九回会録』(一九四〇)、八七―九四頁。

(33) 『慶安老会第三五回会録』(一九四〇・一二・一七)、九八頁。

(34) 『慶安老会第三六回臨時老会第一回会録』(一九四二・一・六)、一一七頁。

『慶安老会第三七回会録』(一九四二・六・二)、一二四―一二七頁。

(35) 裴興稷『鳳卿李源永牧師』、一一五頁。

(36) 同上。

(37) 『韓国基督教の歴史 II』、三〇三頁。日本的基督教は日本帝国主義の立場で見ると、基督教を日本化すると言いながら実際には基督教の変質を強要したものであり、基督教の立場で見ると基督教を日本帝国主義の国籍に調和させると言いながら実際には自己合理化の弁明に過ぎなかった。なぜならこのような調和とは基督教の本質を歪曲せずには成し遂げられないからである。実際に日本帝国主義が主張する日本的という意味は軍国主義的天皇崇拜的であるという言葉に代替できる。

(38) 『慶安老会第三七回会録』

(39) 『安東教会八〇年史』、一六八—一六九頁「안동교회八〇년사」。

恐らく一九四四年一〇月に安東農林高等学校学生たちが組織した「独立回復団」に所属した会員であったと思われる。この団体は一九四五年三月一〇日に闘争日と定め安東警察署と憲兵隊を襲撃する計画を立てたが、この計画が事前に発覚し、この団体の全貌が顕わになった。そしてこの団体に所属した安東農林高等学校学生五〇人全部が拘束された。

(40) それ以外にも李源永が記録した『聖書勉強の書』の中に「ヨハネ黙示録」がある。これが講義を聞いて記録したものか、あるいは講義を準備するために作成したものか把握しにくい。

(41) 南ヨンファン訳、『日本検事の起訴内容。日本帝国主義の受難聖徒の歩み』図書出版ヨンムン、一九九〇年、三四—三五頁「남영환역, 『일본 검사의 기소내용』」。

李基先は続いて言う。「千年王国の建設のためにまずキリストは空中に再臨し地上に忠誠の信徒たちは昇天し既に世を去った忠誠の信徒たちは(も)肉体で復活し昇天されキリストを中心とする七年間空中で婚宴の間に地上ではすべての民に大艱難が臨み人類の三分の一が死亡する。そしてこの期間が終わるとキリストは彼の肉体を持って地上に再臨し日本帝国を含む世界のすべての国の国家制度を破壊しこの地上でキリスト教会を持って(……)罪悪がなく、差別がなく、圧迫もない絶対平和の理想的な地上に神の国言わば千年王国を建設しキリストは万王の王としてこれを統治し篤実な信徒たちを各地域の一万王に任命する」。

(42) 同上、三五、四一頁。

(43) 同上、三三頁。

(44) 「判決文」(一九四一)刑公第三三八号。

『独立運動史資料集二二』、独立運動史編纂委員会編、一一四二—一一四三頁。

- (45) 社会の秩序を妨害する目的で集まる言論集会結社などを禁止するもので、神社参拝が偶像だと反対する言論や集会及び宗教結社もここに該当した。

- (46) 天皇は神でないと主張したのである。

- (47) 日本帝国主義の立場から見ると、神社参拝は日本国民の精神統一のためのものであった。しかしこの神社参拝をしないように妨害するとこれは民心を扇動する罪に該当する。

- (48) 『日本検事の起訴内容。日本帝国主義の受難聖徒の歩み』四一—四二頁。

- (49) この部分の叙述は李源永の子どものたちの「証言」(一九九八・一二・二八)に依る。

- (50) これとの関連で李源永は一九四〇年九月から約三カ月間黙示録の七教会について説教した。

訳注

- (訳注1) 『大韓イエス教長老会總會第三九回會議録』(一九五四年)、二七一頁『대한예수교장로회총회제三九회회의록』。

- (訳注2) 林熙國『學者・牧会者鳳卿李源永研究』基督教文社、二〇〇一年、二七九頁『선비목회자봉경이원영연구』기독교문사』。

- (訳注3) 日本の長老派教会は「大会」、「中会」、「小会」で構成されている。韓国ではそれらが、「總會」、「老会」、「堂会」と呼ばれている。以下、本書での「總會」とは日本の「大会」、「老会」とは日本の「中会」と理解してよい。

- (訳注4) 本書で「△△老会」と用いられているときに、△△は殆ど地域名を表している。例えば、ここでの「安州」とは「平壤」の西部の地域名である。

- (訳注5) 本書では「慶安老会」という言葉が多く用いられている。李源永の所属老会である。李はそこで牧師按手を受け

(一九三〇年)、その所属の「安基教会」で牧会した(一九三二年から一九三八年まで)。「慶安」の「慶」は「慶尚北道」の頭文字、「安」は「安東」の頭文字であろう。すなわち、「慶尚北道」の「安東」地域の老会「中会」の意味。

(訳注6) 劉ジェギは、牧師兼社会運動家であった。教会に協同組合を設けて成功した後、三二歳の時に慶尚北道義成郡所在の義成教会に赴任した。そこで青年運動を展開し、青年たちに感化を与えた。警察はこのような青年運動を弾圧するために、後述する「農友会事件」を捏造したのである。『慶安老会七十年史(一九二一—一九九二)』大韓イエス教長老会慶安老会、一九九二年、一九三頁『경안노회칠십년사』대한예수교장로회경안노회』。

(訳注7) 「慶北」とは「慶尚北道」の略称である。

(訳注8) 原文には「世代主義」となっているが、ここでは「デイスペンセーション主義」としたい。以下の書を参照されたい。Donald K. McKim (ed.), *The Westminster Handbook to Reformed Theology*, Westminster John Knox Press, 2001 (ドナルド・K・マッキム編『リフォームド神学事典』石丸新、村瀬俊夫、望月明 日本語版監修、いのちのことば社、二〇〇九年、三三四頁)。

〔謝辞〕 翻訳に際して、聖学院大学出版会出版部長の山本俊明氏に大変お世話になった。氏に感謝したい。